

感覚過敏を一步踏み込んで知らないとトンデモ指導をしてしまう

～ 感覚過敏（鈍麻）を切り口として自閉症特性を読み解く ～

1. 前置き（自閉スペクトラム症をめぐるこの20年の動向）

文部科学省からの2001年の「21世紀の特殊教育の在り方について：一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について（最終報告）」や2003年の「今後の特別支援教育の在り方」により、「知的障害を伴う自閉症児については、（中略）知的障害教育の内容や方法だけでは適切な指導がなされない場合」があると指摘され、自閉スペクトラム症（以下『自閉症』とする）のある児童や生徒へのその障害特性に応じた指導が本格的に拡がっていきましました（…意地悪な言い方をすると、自閉症の障害特性に応じた指導をしていないと、時代は2000年代前半にまで遡ることになります。その頃、先生は何してましたか（笑）？）。また、最近の動向も知っておいた方がよいことなので書きますが、2013年にDSM-5、2018年6月にはICD-11が公表され、その中では「神経発達障害」という診断カテゴリーができ、知的発達症、自閉スペクトラム症、発達性学習症（ICD-11内。DSM-5では限局性学習症とされている）、注意欠如多動症という名称に改められました。文科省で使用する単語もDSM-5、ICD-11に準拠して、次第に置き換わっていくことと思われまします。

2. 「感覚過敏」への着目は、意外にも最近始まったばかり

一方で自閉症のある方々のもつ「感覚過敏」という特性への注目は、意外にも最近です。2013年のDSM-5で初めて以下の様な記述が成されました。

『個々によって異なるが、身体面では、視覚や聴覚、触覚や臭覚味覚などに感覚知覚の過敏性や鈍感性がある場合がある。』

感覚過敏は中枢神経系の障害に起因するので（要するに脳みそや神経そのものの障害であるということ）、治ることはありません。ただ、視覚過敏・聴覚過敏とちがって、触覚過敏は体幹トレーニングをして姿勢が立ち、目と耳を上手に使えるようになると、一定の改善を見せるとされています。

また、聴覚過敏の改善と悪化については、環境に左右されることが多く、例えば

クラスで大きな声を出す友達と一緒にいる ⇒ 聴覚過敏が悪化する

クラスで大きな声を出す友達がいらない ⇒ 聴覚過敏が改善する

と環境に振り回されてしまうので、「良くなった！」と錯覚することなく、聴覚過敏があり、耳ふさがりが出ているお子さんは、迷わず場面に応じたイヤーマフの使用を教えてあげることが大切です。

3. 自閉症当事者研究の発展 - 『自閉症感覚』に迫ろう！！-

ドナ・ウィリアムズやテンプル・グランディンを皮切りにして、この20年では自閉症当事者からの自伝書が複数発行され、自閉症のある人の内面が少しずつ明らかになってきました。ちょっとたくさんになってしまうのですが、自閉症がある人に寄り添うためには、とても貴重な知見なので、以下にその一例を羅列します（もっと知りたい人は、YOUTUBEでNHKドキュメンタリー「自閉症の君が教えてくれたこと」を観てみて下さい。1時間46分有るけれど、すごく勉強になります。

URL: <http://bit.do/20161211asd>。

..なぜ跳びはねるのかという質問への返答として-

それは飛んでいるときには、自分の身体の部分が良く分かるからだと思います。手を叩けばここが手。跳びはねれば、

ここが足。という風に。 東田直樹 2007

・みんなのいるところは キライ。音が大きいところは キライ。物が多いところは キライ。

どこに行っても うるさくて 僕はいつも ガマンできない。 東田直樹 2005

・雨が痛い。扇風機の風が痛い。カメラのフラッシュの後、何も見えなくなる。こたつに入ると足が消える。

ニキリンコ 2004

・雑誌売り場を通ると、私の目には次々と雑誌の見出しが飛び込んできます。私の頭の中には、私が理解できないほどのものすごいスピードで様々な文字が洪水のように入ってきてしまうのです。雑誌売り場を離れても見出しの文字はまだ私の頭の中に残っています。そのため、緑色や葉っぱっぽいものを見ても、それが野菜だということを理解できず、それを自分が買いたいかどうかさえ解らなくなってしまいます。

ドナ・ウィリアムズ 1995

・僕は雨が降ると、まず音に驚きます。皆は雨の音がすぐに分かるみたいですが、僕は「雨だね」と言われるまで、この音が何で、どこから聞こえてくるのか不安になるのです。だから、雨が降ると音と雨を結びつけようと、じっと雨を見るのです。雨を見ると、今度は雨粒に見とれてしまい、自分がどこにいるのかも忘れてしまいます。次々と降り続く雨粒が、まるで僕の体をすり抜けて、地面に落ちているかのような感覚に陥るからです。 東田直樹 2010

・声は、どこから聞こえてくるのでしょうか。それは頭の上からなのか、背中の方からなのか、それとも僕の目の前からなのか、僕にはとても謎なのです。 東田直樹 2010

・みんなは物を見るとき、まず全体を見て部分を見ているように思います。しかし、僕たちは、最初に部分が目に飛び込んできます。その後徐々に全体が分かるのです。例えば、蝶を見ます。すると、蝶と判断する前に、蝶の羽の白い色が目の中に飛び込んでくるのです。目で見ているものは蝶なのに、頭の中は白い色でいっぱいになります。…その後、すぐに全体に目が行くので蝶と認識します…。 東田直樹 2007,2010

・記憶はアニメにはならず、紙芝居か、さもなければ1コマずつのマンガになる。コマとコマの間で、色々と見逃しているとしか思えない。 ニキリンコ 2005

・思い出す行為は記憶と記憶の間をバツタのようにピョンピョンと跳び回っている感じ 東田直樹 2010

・手足がいつもどうなっているのかが、僕には分かりません。僕にとっては手も足もどこから着いているのか、どうやったら自分の思い通りに動くのか、まるで人魚の足のように実感の無いものなので、まるで借りてきたロボットの中にいるようなのです。 東田直樹 2010

・何か行動をするとき、言葉の合図がなければ次の行動に移れないときがあります。それがなぜなのかは僕にも分かりません。 東田直樹 2007

大きな声や過剰な接触がなぜ NG なのか、なぜ自閉症教育が知的障害教育と「別物」なのかを上記当事者自伝からも読み取れます。学ぶべき事を構造化し、環境を整えることが本当に本当に大切。

4. 「感覚過敏」から自閉症を紐解く -上記の自閉症の当事者感覚を受けて、先生は何ができるのか?-

実は本号は、次回「特に重度の自閉症のある人の学びを、私たちはどう支えられるのか？」号への前段・伏線です。この2週間くらい右図の本を読んでいた。この本では「感覚過敏」が1歳からの言語発達をジャマして、自閉症特有の症状を引き起こすという仮説に基づいて、自閉症支援はどうあるべきなのかを、もっと深く掘り下げられないか?ということが書かれています。次号では感覚過敏の理解を基に、自閉症のある子どもが躓きやすいとされている二項関係(私-モノ)から三項関係(私-あなた-モノ)への移行は、専門性に基づくとどのように学習させることができるかについて解説します。普通にやっても特性がジャマして上手くいかないんですよー。興味深いでしょ。

